

アジアの友

The Asia-no Tomo

No. 558

プラユーン シオワッター
「私と日本」

元日本留学生の半生 母国の経済技術発展への貢献と絆

コロナ禍の前後における外国人留学生数の推移 国・地域別分析



外国人留学生受け入れ促進のための ABKアドミッション総合サポート

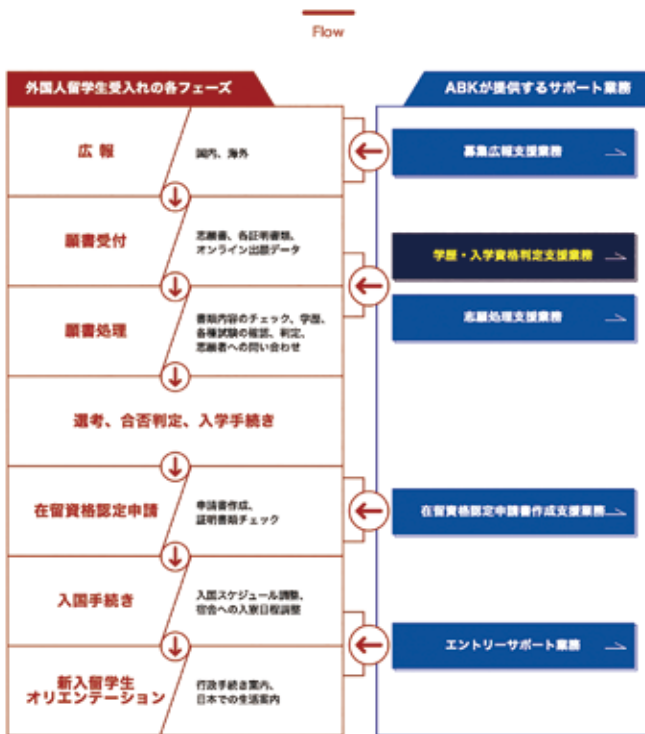
大学の世界戦略は アドミッションの強化から

ABKの大学国際化支援サービス

外国人留学生受け入れのあらゆる局面でのトータルサポート

公益財団法人アジア学生文化協会（ABK）では、長年外国人留学生を受け入れてきた実績のもとに日本の高等教育機関への外国人留学生受け入れ支援業務を行っています。海外での広報活動から入学後のオリエンテーション実施まで、外国人留学生受け入れのあらゆる局面でのトータルサポートを行います。

外国人留学生受け入れフロー



学歴・入学資格判定支援業務

志願者の学歴が大学入学資格を満たすかどうかを調査、レポートします。果たしてこの志願者の学歴は「日本の学校教育における12年の課程修了」に相当すると言えるのか。

世界各国の教育制度、大学入学資格統一試験の有効性、外国人学校の認定、中等教育修了証明書の判定など、志願者の学歴が日本の学校教育法の規定する大学入学資格および各大学の出願条件を満たすかどうかを見極めるには、詳細な調査が必要となります。

今後ますます志願者の出身国および学歴構成の多様化が予想されることから、出願資格判定に資する各志願者の学歴調査レポートを提供します。

※厳しく規定されたセキュリティ環境のもとで業務を行います。

ご相談・お問合せ （公財）アジア学生文化協会 国際教育支援事業部 ☎ 03-3946-7565

https://www.abk.or.jp/international_business_support/

アジアの友

2024年4-6月号 第558号

目次

| | |
|----|---|
| | 講演録 |
| 2 | 「私と日本」 元日本留学生の半生 母国の経済技術発展への貢献と絆 ブラユーン シオワッタナー |
| 14 | ブラユーン氏補足インタビュー |
| | 考察 |
| 18 | コロナ禍の前後における外国人留学生数の推移 国・地域別分析 (公財) アジア学生文化協会 白石 勝己 |
| | 私の意見私の体験 |
| 25 | 「大切なのは日々緊張感を持って目標に向うこと」 賽 夫 ～ 中国 内モンゴル自治区 |
| | 新星学寮での生活 |
| 28 | ⑭「日本人寮生に聞く新星学寮の生活」 太田美蘭さん |
| | コラム 泰日工業大学奮闘記 |
| 32 | ⑤「グローバルコミュニケーション学部が誕生」 水谷 光一 |
| 34 | Event & Festival |
| 35 | 知友会通信 奨学金情報、イベント情報 |
| 36 | MEMBERS 会費とご寄附のご報告 |

<表紙> 大都会バンコクとチャオプラヤ川

by Y.K

「私と日本」

元日本留学生の半生 母国の経済技術発展への貢献と絆

プラユーン シオワッターナー

5月10日（金）アジア文化会館において、泰日経済技術振興協会（TPA）の会長であるプラユーンシオワッターナー氏による講演会「私と日本」が開催された。TPAは、日本からのODA受入れパートナーとして1973年に元日本留学生、研修生によって設立された団体で、1990年代には完全に独立自走化し、2007年には泰日工業大学（TNI）を設立した。

プラユーン氏は1967年に来日され1974年まで電気通信大学、大阪大学大学院に留学、AOTSの技術研修を終え、母国であるタイに帰国された。帰国後はTPAの事務局長、会長などで関わる他、チュラロンコーン大学準教授、タイの国立計量研究所所長、国立科学技術開発機構副所長など、エンジニアとして、さらに各機関の経営トップとして活躍されている。

今回の講演録の補足として、日本留学に関係する部分にフォーカスしてインタビューもお願いした。講演録と合わせ読んでいただければ、一人の元日本留学生の活動がその留学で形作られた知識、経験、さらに人的広がりを通して、いかに社会や産業の発展に対し、また双方の国や地域的な広がりをもって、広範な影響を与え、貢献しうるかということが理解されると思う。

| ▶ 学歴等 | |
|---------|--------------------------------------|
| 1967-72 | 電気通信大学（電気工学）卒業 |
| 1972-74 | 大阪大学大学院工学研究科修士課程（電気工学）修了 |
| 1982-84 | ニューサウスウェールズ大学（オーストラリア）修士課程（科学技術政策）修了 |

| ▶ 職歴等 | | 泰日経済技術振興協会（TPA）関係 |
|---------|----------------------------------|-------------------|
| 1975-76 | カセサート大学工学部講師 | |
| 1976-80 | チュラロンコーン大学工学部講師 | |
| | | 1980-81 研修部長 |
| 1981-82 | 東芝株式会社テレビ部副部長 | |
| 1985-90 | チュラロンコーン大学工学部準教授 | |
| | | 1990-93 事務局長 |
| 1993-94 | タイテレフォン&テレコミュニケーション株式会社（TT&T）副社長 | |
| 1994-98 | ク룬タイタナキット株式会社副社長 | 1995-98 専務理事 |
| 1998-02 | タイ国立計量研究所（NIMT）所長 | 1998-01 理事 |
| 2002-05 | バンク・タイ・パブリック株式会社副頭取 | 2001-05 副会長 |
| 2005-10 | タイ国立科学技術開発機構（NSTDA）副所長 | 2005-09 会長 |
| 2011 | タイ国立計量研究所（NIMT）顧問 | 2011-13 会長 |
| 2012 | AUN/SEED net Secretary General | |
| 2013-17 | タイ国立計量研究所（NIMT）所長（第二期） | |
| | | 2020-21 事務総長 |
| | | 2022- 現在 会長 |

本日はありがとうございます。3団体¹共催での講演会を開催していただき感謝申し上げます。今日の話は、私の人生の「旅」についてです。この話が皆さんに多少でも参考になれば、私は本当に幸いに思います。

最初にアップルの創業者のスティーブ・ジョブズの言葉をご紹介します。

「将来を見据えて点と点を繋ぐことなどできません。過去を振り返ったときに初めて点と点が繋がるわけです。ですから、私たちは将来どこかでその点が繋がると信じなければなりません。直感、運命、人生、カルマ、なんであれ、何かを信じる必要があります。」これが私の今までの「旅」のひとつの結論です。人との出会いは、一つの「点」です。この結論を皆さんが頭の片隅に入れておいて話を聞いてもらえればと思います。

■ 日本への旅

私は、1948年生まれで今76歳ですが、生まれた場所はバンコクから南へ約700kmの距離にあるトムソンというところです。列車で12-13時間位かかります。故郷にいたときは徒歩か自転車のみでの移動なので、行動範囲は10キロ程度でした。1965年にバンコクの学校に入り、新しい世界に入りました。バンコクで初めてテレビを見ました。行動範囲も少し広くなりましたが、とはいえバンコクとか、タイ国内だけです。

高校卒業の後、チュラーロンコーン大学理学部に入学し、1967年に日本の文部省の奨学生試験に受かりました。その時は大変うれしかった。当時は日本製品…ソニー、ナショナル製品などがタイでも売っていましたから、日本への出発は、見たことのない新しい世界に向うという感覚がありました。



■ 毛沢東

当時タイから日本へは直行便がなく、一度香港に降りないと日本へは行けませんでした。香港に1泊して翌日また飛行機に乗るのですが、その前にデパートにセータを買いに行きました。そのデパートの壁に大きな毛沢東の写真が飾られていました。その写真を見て、とてもびっくりしたんです。私にとって、今までの常識がひっくり返されるような感じでした。軍事独裁国家のタイでは、毛沢東語録を持っているだけでも裁判にかけられ、数年間拘留される。その人の写真が香港では堂々と街中に飾ってある。そのこと自体考えられないことでしたが、同時に疑



1. 一般社団法人日タイ経済協力協会、一般財団法人海外人材育成協会、公益財団法人アジア学生文化協会の3団体。姉妹団体として泰日経済技術振興協会の設立、運営に協力した。

間を持ちました。タイで言われているように、本当に毛沢東は悪い人なのか？ それともいい人なのか？ なぜこの場所に頭上高く飾られているのか？

■ ベトナム反戦



また ベトナム戦争についてもそうです。日本に着いたとき、寮にベトナムの留学生が10人いました。タイにいた頃は情報を得る手段はラジオだけで、ほとんどが国営放送でした。タイには米軍基地があり、米軍は南ベトナムから北ベトナムの侵略を防ぐんだ、というようなことを聞かされていました。ほとんど毎日そういう風に私は聞かされました。寮の住人たちは南ベトナムの人たちで、とても共感を持ってました。ある日彼らに「サイゴンはベトナムで一番大きな都市ですか？」と聞いたら、一番大きいのはサイゴンではなくハノイだといいました。その時に初めてベトナムの人は南とか北といった意識を持っていないのだと思いました。それまで南ベトナムと北ベトナムの2つの国があると思っていたのですが、その私の常識は違ってきました。

■ 大学紛争

当時、日本で行われた大学紛争も同様です。当時は紛争があると講義が休校になるので、あってもいいかなという程度でした。なぜこんなことになっているんだろうと、素直に興味を持ったという感じでしょうか。実際に見に行ったりもしましたし、東大にいたタイの先輩に説明をしてもらっ

たりもして、なるほど、そんな考え方もあるんだなと理解するようになりました。

当時は大学紛争だけではなく、ベトナム戦争や公害問題など、いろいろな社会問題が発生していて、それに対する様々な社会運動が展開されている時でした。そういう活動をしている当事者の方々には失礼かもしれませんが、私にとっては視野を広げるよい勉強になったというのが正直な気持ちです。

■ タイ留学生の野球チーム



大学1、2年生の時にタイの仲間と野球チームを作っていました。当時日本でタイの学生チームは4つあり、夏休みに野球の試合をしていました。私はピッチャーでした。最後の大会で優勝して、私は最優秀投手になりました。日本に来なければ、野球を知る機会もなかったですし、自分が投手としてチームに参加することなど考えられなかったです。ちなみに私は巨人ファンでしたが、阪神の江夏、広島の安仁屋、外木場、南海の野村もファンでした。

■ 富士山レーダーの話

千葉大学の留学生科にいた時、印象に残っている事のひとつに先生が教えてくれた話があります。1959年、台風による被害で死者が数千人になりました。台風を観測するには高いところにレーダーを設置しなければならず、富士山に設置するという計画がありました。しかし富士山の頂



大学以外の日本社会に触れる機会をくれた人でした。

1971年東大駒場寮では毎年11月頃、留学生がオープンハウスを実施して近隣の人々に交流のため寮に来ていただき、各国のお菓子や切手などの展示をして楽しんでもらっていました。

その時、私たちはビールを配りました。当時タイと日本の貿易不均衡が問題となっていた時期です。どちらかを批判する

上付近は気候も厳しく設置するのはとても困難でした。その時の設置作業のリーダーの方が「男は一生に一度でいいから子孫に自慢できるような仕事をすべきである」と仲間を激励し、観測レーダーの設置を成し遂げ、その後の被害を少なくすることが出来るようになったという話です。私は今でもこの話がとても深く印象に残っています。

日本社会との出会い

今日まで、大いに私に役立ってきたのは、もちろん日本留学生時代の大学での「点」(知識や先生、友人)ですが、やはりその後の日本社会との出会いからも大きな影響を受けています。かなりバラエティのあるそれぞれの「点」が私にとって大切な物になっています。

ベトナムの平和と統一を訴えるベトナム人留学生の強制送還とABK 工藤さんとの出会い…

ABKの工藤正司さんのこと

工藤正司さん(アジア学生文化協会)は、最初に、



るのが目的ではなくこういう事実があるということ来館した人々に知ってもらう事が目的でした。後日、工藤さんから電話がかかってきました。ただ単に「工藤」という名前を告げられただけだったら信用しませんでした。ABKの工藤と名乗られたので信用しました。駒場寮は食事をして寝るだけの場所でしたがABKは家族の様に何でも相談できる温かさがある場所だと理解していたからです。工藤さんの説明では、ベトナムの平和と統一を掲げる留学生が強制送還されたとのことで、タイの学生にも同様な事が起こるかもしれないので、注意して欲しいとのことでした。また、「何かあったら協力します」と手を差し伸べてくれ、大変心強かったのです。

ベ平統からベ平連

この当時、色々な方の紹介で様々な活動をしている人たちに会いました。「ベトナム平和と統一のために闘う在日ベトナム人の会」(ベ平統)の指導者グエン・アン・チュンさん(東工大)の紹介で、ベトナムに平和を!市民連合(ベ平連)の井上澄夫さんとも会いました。彼から話を聞いて、色々な考え方があつた事を知りました。丸々全てを信じるのではなく、考え方も色々あるのだということ学びました。それまでのタイでの一面的な物の見方から多角的に物事を見る事が出来る様になりました。

■ 公害問題との接点

もう一つは公害問題との接点です。宇井純さんが外国人留学生や日本に住んでいる外国人を連れてバスで公害見学に連れて行ってくれました。そして当時の日本の公害がどのような状況かを教えてくださいました。印象に残っているのは足尾銅山です。そこにはほとんど木がなく、私たちにはとても刺激的な光景でした。その後公害関係の本をタイ語に翻訳してタイに送り出版しました。タイの工業化は良いことではあるものの公害という問題もあるということを理解して欲しかったためです。また私たちが帰国する前にシーラチャー（チョンブリー県）での原子力発電所の建設反対運動が起きました。既に政府は承認していましたが、タイの学生達と共に私たちも参加して反対運動を実施して、結果としては建設廃止となりました。

宇井純さんが作ったこの本をタイ語に訳して出版しました。タイの人たちや大学生が公害の事を知ってもらえるようにという思いがありました。



■ 万歩計

これは私の友人からもらった万歩計です。10年位前に食事をしている時に渡されてタイに帰ったら毎日1万歩歩きなさいと言われました。始めた当初ははともつらかったのですが、今では毎日1万歩は歩けるようになりました。日本社会との



出会い、いろいろな方と知り合った事が点となり、その上に団体（ABK・AOTS・JTECS）の人たちと知り合ったことで、私の新しい人生の再出発となったという感じがしています。結局今まで勉強だけでしたら、このような「旅」にはなりません。工藤さんの紹介で新しい日本社会・団体・友人と知り合い、考え方は色々ありますが、やはりそれぞれから刺激を受け、今日現在の私になったという感じがしています。

■ 3つのエピソード

この3つのエピソードと穂積先生との出会いは今日に至るまでの私の出発点であると私は信じています。

最初のエピソードは1967年、日本に着いた時に千葉大学留学生別科の大月先生がオリエンテーションで日本語の大切さを説明されました。その時の話は、いくら難しくても「千里の道も一歩から」という話で「一歩踏み出せば可能性は出てくる」というような意味で私は受け取りました。非常に良い教えであったと思います。

2つ目のエピソードは1970年に四国の友人が私を吉野山に案内してくれた時のことで、彼は私に言いました。「大学を卒業してタイに戻ったら、ぜひ日本とタイの架け橋になってほしい」。私は“架け橋”がどういう事かは、はっきりとわからなかったのですが、約束としてうなずきました。

3つ目のエピソードは1973年に大阪大学（阪大）で勉強している時に、私を息子の様に大事にしてくれた会館のおじいさんが教えてくれたことです。当時、そのおじいさんから色々注意を受けたのですが、その中でも心に残っているのが「旅の恥は掻き捨て」と言う日本の諺があるんだ。旅に出る人が、もう二度と戻らないと思うから、旅先では恥ずかしい事でも平気でやる、と言う意味だ。君はタイに戻るからと言って、絶対その様な態度、行動はとらないように。」と教えてくださいました。

この3つのエピソードが後々も自分の人格形成



に影響を与えたと思います。

■ 穂積五一先生との出会い

穂積先生との出会いは、1974年のAOTS（海外技術者研修協会／現 海外産業人材育成協会）で研修の時でした。当時は公害問題に関心を持っていた時であり、日立的那珂工場で測定器の研修をし、その後東京都での測定実習も行いました。

穂積先生とお会いした時、先生は私に泰日経済技術振興協会の説明をしてくださいました。日本側には日タイ経済協力協会（JTECS）、タイ側には泰日経済技術振興協会（TPA）がある。原則として「日本はお金は出すが口は出さない」ということになっている。日本側の窓口は一本化して穂積先生が責任者となっているJTECSである、という説明でした。そして最後に「タイに戻ったら是非、このTPAをタイ社会に役立たせてほしい」と言われ、私の心にとっても深く残りました。先ほども申し上げましたが、これらが私の帰国後の出発点となりました。

■ TPAと私



左の建物が私が長年関わってきた泰日経済技術振興協会（Technology Promotion Association(Thailand-Japan)=TPA）本館です。1975年当時、日本政府に土地を買っていただき建設しました。その後、協会が事業を発展させ独自でお金を貯めて、足りないところは日本の海外経済協力基金（OECF）からも融資を受け1998年にバンコクのパタナカーン区に新館を建設しました。写真右の建物です。



TPAを作ったのは、お二人の方、穂積先生とソムマーイさんです。ソムマーイさんは慶応義塾大学卒業後タイ銀行（Siam Commercial Bank）の総裁を務め、大蔵省の大臣にもなった方です。この2人がこの協会を創設しました。一番基本となったのは「お金は出すが口は出さない」という原則でした。今日まで半世紀以上続けられている事業として、この原則がとても大切なことだったと思っています。それと連絡窓口を一本化したことです。タイではTPAが、日本では日・タイ経済協力協会（JTECS）が双方の信頼関係の下で色々な事を相談しながら活動を行ってきました。

TPAの主要な事業はセミナー・研修・出版・校正事業などです。出版事業は当時、現場で働いている技術者向けの本が無く、あったとしても英語版だけでした。それらの本は高価で、そう簡単には読めるものではありませんでした。その様な状況でしたから、留学生の先輩たちが日本の技術書をタイ語に翻訳して出版しまし

た。技術用語を自国語で普及させないと、国の技術は発展させることができない、という考えからです。それらの技術書は現在まで多くの現場で使われています。ある時、私が企業を訪問した際に、その企業の方が「30年前にこの本を買って、今でも使っている」と言われました。本当にうれしい事でした。

当時は様々な分野（エネルギー・コンピュータ・校正・語学・出版・広報誌等）の小委員会がありました。私もいくつもの委員会を経験しました。小委員会はそれぞれ仕事を持っている専門家の委員たちが、月に一度の割合で仕事を終えた夕方から集まり、夜中まで喧々譁々の議論をしながら、現場で必要とされる技術研修の企画や技術書出版の計画を立て、月にいくつかの研修コースを企画し、いくつものタイトルの本を出版しました。これらは、全てタイ側の自主、主体で行われ、日本側の関与は一切なかったのです。この背景に「お金は出すが口は出さない」「企画運営はタイ側に任す」という原則があって、初めてできた事だと思います。

私は、小委員会のメンバーから始まり、その後は小委員会の議長になり、経験を積んだ後理事になり、最終的に会長になり4期9年勤めました。

■ パタナカーン新館

スクンビット本館が手狭になり、1998年バンコクの東部スワンルワン区パタナカーン路に新しい技術振興センター（TPI）を作りました。スクンビット本館は床面積4700㎡の建物でしたが、新センターは床面積7000㎡、7階建てガラス張りの建物です。シリントン王女にご臨席いただき開館式を行いました。



1998年 TPA 技術振興センター開館式。シリントン王女ご臨席

新たに工業計測機器校正センター、実験器具検査センター、産業技術情報センター、電気・機械保全実習室、空圧・油圧実習室、一般研修室、コンピュータ研修室、図書室、食堂、書店が配置され、規模を大きく拡大して事業を開始しました。4800㎡の土地は自前で購入しましたが、建設費用は日本の海外経済協力基金 OECF(The Overseas Economic Cooperation Fund) からの融資（借金）でした。この OECF との関係も私にとって重要な1つの「点」となりました。これが後ほど別の「点」に繋がっていきます。

しかし、開館のタイミングはアジア通貨危機と重なり、タイにとって最悪の時期でした。当時の工業大臣に開館式への列席を依頼しに行ったのですが、大臣から「この施設はコンドミニアムとして利用することになるね」と言われました。深刻な経済危機の状況下において、使いみちがないだろうというような事を笑いながら言われました。今では笑い話ですが、私たちは



パタナカーン新館同様、泰日工業大学開学式にシリントン王女ご臨席

この状況を乗り越え、大きく事業を発展させることができました。OECFの借金を完済し、そこからさらに資金を蓄えて、2007年には泰日工業大学を設立しました。開学式にはTPIの開館式の時と同じように、シリントン王女のご臨席を頂きました。現在は3学部4000人の学生を擁するまでになっています。

■ タイ国家計量標準機構の設立

1998年前後に科学技術省にいる知り合いから連絡があり、「タイに計量研究所を設立する予定ですが関心はありますか？」と聞かれました。私としては、測定器の校正の大切さはTPAで行っていた事もあり、十分に理解していました。タイ国内には一次標準設備がなく、シンガポールやオーストラリアに二次標準機を持って行って校正してもらわなければいけません。タイ国内にあれば他国にお願いすることもなく費用面でも低く抑えることが可能となります。最終的にこうした理由で、所長の選出の過程に応募して受けました。1998年6月1日に組織として始動されました。当時は経済危機の中であり、真っ暗な状況でのスタートになりましたが、この時も大槻先生の「千里の道も一歩から」という言葉が思い出されました。



計量研究所

■ 危機の中の出発

今までの日本との間で築き上げた信頼関係を活かして、日本の関係機関に資金面や技術協力に関する相談を行いました。

研究所の立ち上げ時に考えていたのは、当時の経済危機の中でのタイの予算状況では1年に1つ程度の標準となる機材しか購入できず、それでは計量研究所は成り立たないということでした。そこで私は

海外経済協力基金(OECF: Overseas Economic Cooperation Fund)後の国際協力銀行JBIC: Japan Bank for International Cooperation)からラボの建設と標準機材購入資金10億バーツ(当時のレートで約100億円)を借り入れました。また日本の産業技術総合研究所(AIST)を通じ、計量標準総合センター(NMIJ)をお願いして指導のための専門家を派遣してもらいました。

■ 危機の中の出発 融資借入

当時国の借金管理委員会からは、未曾有の経済危機の状況下で、なぜこんなにも多額の借金をしなければいけないのかと問われたので、私はこういう危機の時だからこそ、品質管理の一番基礎となる所に投資することで、タイ国は世界に対して国家の意志を伝える事になるのではないかと説明しました。結果的には、委員会もOKを出し建物も建てられ設備も整えられました。

私はこの研究所に2度勤めています。

1回目は1998年から2002年、2回目は2013年から2017年です。1回目から2回目まで11年位空いています。なぜ継続して勤務しなかったのか？裏話を簡単にお話します。

研究所設立時、機材は問題なかったのですが、建物の建設は入札で決定しました。決定した企業を日本側JBICにも連絡しました。日本側からは日本の企業がなぜ選ばれないのかと問われましたが、タイ企業の方がスペックを満たし低価格であったためである、と説明しました。

タイでは政府関係の建築物を建てる時は最終的に大臣の承認が必要となるのですが、中々大臣の承認が下りませんでした。半年間何度も大臣に許可を求めたのですが会ってもらえずにいました。あるとき大臣秘書から呼ばれて、この建物はなぜこんなに高いのかと言われ、何かあるのかと疑うようなことを言われました。私は計量にかかる建物の特殊性を色々説明しましたが、結果的には再入札をするように要求されました。

結局、政治に関連する企業を選ばなかったためだと思いました。秘書に会う前になんとかそんな雰囲気は感じてはいました。私は技術面も十分検討し、オープンに入札して会社を決定したので、秘書に「再入札は違法だと思う。仮に（再入札を）進めれば大きな問題が波及する恐れがある」と意見を述べました。上層部の意図に従わなかったため、結果的に私は1期4年で退職することになりました。

その後また点が繋がるのですが、あるとき一緒に研究所を務めていた同輩と連絡を取ったとき研究所に席があるので「応募してください」と言われ応募して、面接して受かりました。2回目の研究所所長勤務となりました。

国際度量衡局

2回目の所長を勤めていた時にフランスにある国際度量衡局から招待されて、今日までの成長に関して国際会議の場で説明を行いました。また、タイでアジア太平洋計量計画（APMP: Asia Pacific Metrology Program）総会を開催し Developing Economy Committee (DEC 発展途上国の機関を援護する委員会) の議長を勤めました。



フランス国際度量衡局での公演



タイで開催した APMP 会議 Jul 01.



アジア太平洋計量計画総会で DEC の活動を説明する

■ 国家計量研究所に対する日本の協力

OECFの資金援助の他、JICAを通じての支援は以下のような大きな規模になりました。

- ・日本での受入研修 タイから36名のスタッフを計量標準総合センター（NMIJ）へ派遣し、3か月間、現場での実地研修を実施しました。この他にもAOTS経由で何人か派遣しています。
- ・日本からの専門家派遣 日本からNMIJの専門家を含めて95名をタイに派遣していただきました。

この支援が無ければ今日の計量研究所の成長はありませんでした。

計量研究所の活動の記録を記した本に、私は以下の様に記しました。

「私は、このNMIJ/NIMT技術協力は、最大規模のもので最も成功した技術協力の一つとして記憶されると確信しています。私たちがこの歴史の偉業に直接参加できて、またその成功の一頁に関わる機会を得たことを誇りに思うものです。」



『産業技術総合研究所（AIST）、計量標準総合センター（NMIJ）の活動の記録』



タイ国家計量研究所は無名の機関からアセアンのトップ機関になりました

■ 再びTPAでのリリーフ登板 コロナ禍の影響とそれ以上の経営危機

TPAの事務総長リリーフ登板のお話をします。2020年の9月末ごろ、夜中に当時の会長から電話があり、コロナ禍の景況でTPAの運営が危機となったため、事務総長を引き受けて欲しいと依頼がありました。これが私にとっても、TPAにとっても多分良い試練となったように思います。当時協会の活動は縮小されました。外因としては、コロナ禍の影響がありましたが、内因として協会の事業を長年続けてきた同じやり方や考え方に疑問を持たず、そのまま現状通りで安泰だと考えていたことがあります。外部の新しい技術を取り入れることもなく、急速に変わる社会の変化に対応できていないということが、コロナ化と同時に非常に大きな問題でした。

実施されていたセミナーの内容を精査したところ、7-8割が以前から実施していたものの繰り返しだということが判明しました。新しい技術・経営等のセミナーがほとんどない状態でした。特にアナログからデジタルへの世界的移行時期でもあり競争力が弱っていました。一方では、コロナ禍によりセミナーもオンラインで実施する必要に迫られ、協会にとって新しい変化への道を切り開かざるを得ないという状態になりました。コロナ禍の影響で3年連続の赤字となり、本年ようやく黒字化する事ができました。協会の理事の間でも、現状を見ればブルーオーシャンの分野はすでにない。競争が激しい時代となりこういう時こそ内部の革新的変化がないと、変化に対応できないということが言われました。早急に内部の人材育成が必要であり、物事の見方や考え方を変えていくための訓練が必要になると認識しました。

■ 2020年、101の法則

これはスタッフに一番初めに見せた法則です。（この「1.01の法則、0.99の法則」は日本の

1.01の法則 $1.01^{365} = 37.8$
 こつこつ努力すれば、やがて大きな力になります

0.99の法則 $0.99^{365} = 0.03$
 逆に少しずつサボれば、やがて力がなくなります

WEBサイトでたくさん見つけることができますが、最初の出典がわかりません。) 停滞の外因はコロナ禍、内因は変化に対応できないことにより少しずつ力がなくなっていくことです。この法則では、ほんの少しでもずっとサボっていれば100の力が1年でなくなることになります。逆に0.01でもコツコツ努力して行くことでやがて大きな力になる。ほんの少しでも改善することにより力をつけていく事が大切だと教えてくれます。

今協会では業務改善活動として、3-4人のスタッフでグループを組ませて毎年発表会を実施しています。ここが協会の曲がり角だと思います。ここで道を間違えれば協会も回復することが出来なくなると考えています。コロナ禍は10年も続くことはなく、内因を改善していくことが大事です。これは今後も継続して行く様に協会幹部にも伝えています。

■ TPA50周年式典開催と現在のTPA

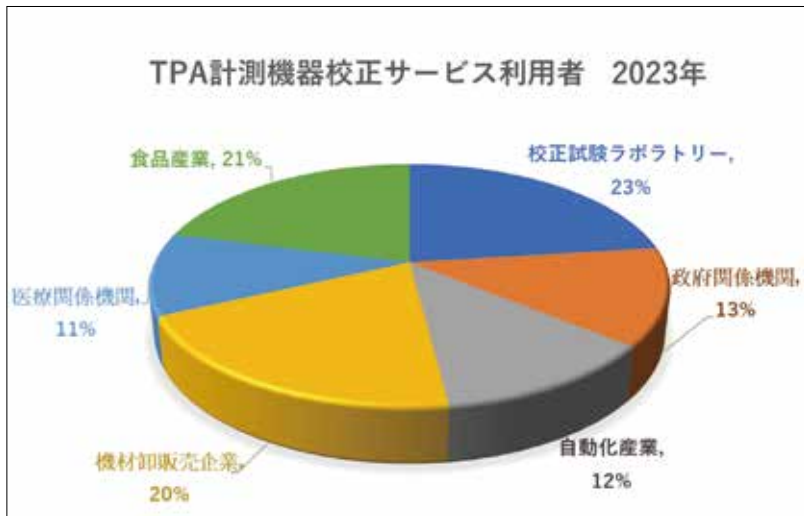
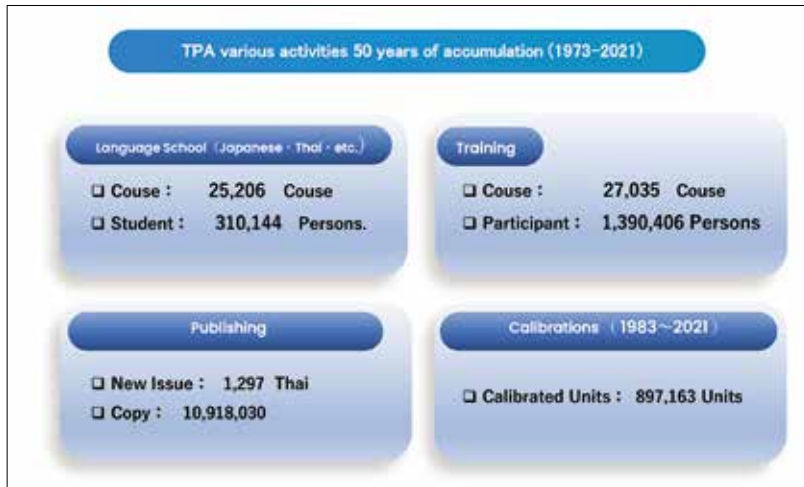
TPAは2023年に設立50周年を迎え、バンコク市内のホテルで50周年記念式典を挙行了しました。口では50周年と簡単に言えますが、様々な人の繋がりに支えられ事業を発展させ、半世紀という時間が経ちました。当初は200万パーツ位(当時のレートで約2000万円)の予算で、スタッフも4-5人程でした。今では3億1千万パーツ(現在レートで約12億4千万円)の予算となり、スタッフも270人となっています。また泰日工業大学(TNI)も出来ました。これは日本側の皆さんと共に誇りに思いたい。皆さんの支援によりTPA、TNIは今日に至っています。これまで実施してきた事業は以下(右頁図表)の通りです。

■ 終わりに 点と点の繋がって見える現在の景色



記念行事に参加してくれた
 桑田 JTECS 理事長、
 梨田駐タイ日本大使、
 タイ商工会議所次長、
 タイ産業連盟会長、
 METI タイ工業省の代表者

「ブルーインシオワッター」私と日本



「将来を見据えて点と点を繋ぐことなどできません。過去を振り返ったときに初めて点と点が繋がるわけです。ですから、私たちは将来どこかでその点が繋がると信じなければなりません。直感、運命、人生、カーマ、なんであれ、何かを信じる必要があります。」

これが私の今までの旅のひとつの結論です。

勲章受章

2023年春旭日中綬章叙勲（日本・タイ間の経済・技術関係の強化に寄与）



プラユーン シオワッター氏 講演会終了後補足インタビュー

—— 来日されたのは1967年ということですが、最初の日本語教育はどこで受けたのでしょうか。

千葉大の留学生課です。留学生のための課程を作って1、2年生はそこで勉強するんです。ちなみに講演会で話した富士山の話はそこで聞いたんです。その2年間で日本語と教養課程も終えたあと試験を受けて、それぞれ進学する大学の2年生に入ります。私は1969年の4月、電気通信大学に進学し3年間学びました。

—— 当時は学生運動の影響で東大と東工大の入試が中止された年ですね。

残念な気持ちはありましたが、しょうがないという感じでした。

—— 日本の学生運動を見て、どう感じたのでしょうか？ 日本の大学が学生運動でピークだった時なので留学生への影響も大きかったのではと思います。

なぜこんなことになっているんだろうと、素直に興味を持ったという感じでしょうか。実際に見に行ったりもしましたし、東大にいたタイの先輩に説明をしてもらったりもして、なるほど、そんな考え方もあるんだなど。

当時は大学紛争だけではなく、ベトナム戦争や公害問題など、いろいろな社会問題が発生していて、それに対する様々な運動が展開されている時でしたから、そういうと失礼かもしれま



せんが、私にとっては勉強になったというのが正直な気持ちです。

—— 日本の大学で印象的だったことがあれば教えてください。

今考えてみると、当時の卒論、学部や修士の論文もかなり最先端のことをやっていたんだと感じます。電通大では有機半導体、阪大の時は発光ダイオードでしたから、現在でも通じるような最先端技術を学んでいたんですね。

—— 帰国される1974年、タイは大変な時で、反日運動に始まった学生革命とクーデターがありました。この運動についてどう感じていたのでしょうか。

原因がないことはないんですね。結局日本の投資が大掛かりにタイに入っていた。知らない外国に行くとも誰でも不安を感じて、自分の身を守ろうとする。突然大挙してやってきた外国人を警戒するのは理解できないことではありません。文化や考え方もわからない。例えばタイ人は他人に頭をたたかれることが許せませんが、

当時の日本人はそうした文化・慣習を理解していなかったかもしれない。ですから現場でもタイ人と日本人のコミュニケーションがうまくとれない。そこが一つの問題です。今、中国企業がタイに入って来ていますが、そのやり方はなんとなく昔の日本と似ている感じがします。

もうひとつはティラユットさん（当時の学生運動のリーダー）が反日運動を利用した、ということ言い過ぎかも知れませんが、学生運動だけでは軍の独裁政権に対抗できない。そこでバンコクの一般市民が感じている共通の感情である“反日”を利用して、人々を団結させるという、それが彼の考え方だったのではないかと思います。その結果、最後には軍事政権を倒せたわけです。ただそこまでやる必要があったかというのはいりません。

—— 帰国後は、チュラロンコーン大学で教鞭をとられました。

帰国後最初はカセサート大学に応募をして、工学部の講師になったんです。しかし程なくして、チュラロンコーン大学（チュラ大）で教員をしていた大阪大学の先輩から、チュラ大に来ないかと誘われ、移ることになりました。

—— 当時、日本の大学卒の留学生はタイでどう評価されていたのでしょうか。

日本帰りの私の先輩方はみなさんそれぞれの職場で成果を出していましたから、決して悪い評価ではなかったと思います。もちろん欧米帰りで優秀な方もいましたが、比較して欧米だから日本だから、といった評価はされていなかったと感ずります。

—— では TPA との関わりについて教えていただけますか。



タイ人留学生の野球チームでは投手として活躍

私は大学卒業後の1974年にAOTS（現：一般財団法人海外産業人材育成協会 当時：財団法人海外技術者研修協会）の研修生になったのですが、その時穂積先生と出会いました。そして、TPAについての説明を受けました。先生はタイに帰ったら、こういう機関でタイの社会に貢献するようにがんばってくださいと言われました。

—— 講演会ではものを正確に計ることの重要性の話をされていますが、“計量”が国家的に重要なことだという認識を持って、それを仕事にしようと思われたきっかけはありますか。

日本で勉強したこと、修士課程を終えて研修生の時に学んだことがきっかけとなり、帰国後にTPAにカリブレーションセンターを作ったのですが、そのときも先輩のスポンさんとケンカのように激論を重ねました。そうした議論がまた勉強になって、なるほど、こういうものがないと品質の保証はあり得ない、ということがどんどんわかるようになっていきました。ですか

ら大学で勉強したとか、誰かに教えてもらったということではありませんでした。

——その後、教育者、エンジニアという立場から経営者という方向にシフトしていったように思うのですが、マネジメントの勉強というのもされていたのでしょうか。

後半の仕事はマネジメントが中心ではありますが、それも技術の基盤がないとできないことです。

例えばタイ国立科学技術開発庁（NSTDA、副長官）時代も計量研究所（NIMT、所長）時代もそうですよね。マネジメントへの理解や人との付き合い方については、たぶん日本の友人たちと付き合う中でいろいろな考え方の人と出会い、意見の対立から議論する中できたえられ養成されていったのではないかと思います。

つまり技術面の知識とマネジメントの知識、その両方が必要なんです。その分野の内容を深く理解していなければ、部下を説得し先に進むことは出来ません。なぜ計量研究所が必要なのか。どうしてそんなに正確で細かいところまで計る必要があるのか。それはマネジメントからのアプローチでは説得できないんです。この精度をどう品質に繋げるか、それがどういう結果になるのか。それを説明できるだけの深い知識がないとたとえマネジメントに長けていても、できない仕事だと私は思います。

—— アジア各国が発展し、日本が先頭を走っていた時代は終わりました。そうした時代、タイ人の学生が日本で学ぶ意味はまだあるのでしょうか。

日本で学びたいというタイ人学生は大勢いま



計量研究所で

す。日本の文部科学省奨学生の試験は、今もかなりの競争率で100倍またはそれ以上だと思います。たしかに私が留学した1967年は、ソニーやナショナル（現パナソニック）など有名企業は全て日本のものですから、技術を学ぶのなら日本へという空気がありました。今は中国企業も韓国企業もありますから、選択肢が増えたことは事実です。しかしどの国も一緒かという、そんなことはないと思います。ある専門分野は日本の方が進んでいる、ある専門は韓国が、中国が、ということだと思います。

ですから日本は自分の強みを見直してそこを磨くべきです。タイに日本から調査団がよく来ますが、なんとなく皆さん消極的な考え方なんです。「もう日本はダメでしょうか？」と。しかし、そんなことはありません。日本のいいところはたくさんあります。そういうところを見直して、ブラッシュアップして、それを留学生に提供していく。自信をもってそういったことを考えて欲しいと思います。

——これからタイと日本、ASEANと日本の関係はどうなっていくのでしょうか。自動車産業でいうと、タイの中で部品まで作れるようになっていく。そういう意味でこれからタイと日本の



職員のみなさんと

関係はどうなっていくと考えますか。

自動車はガソリンからEVや水素、燃料電池などへと変わりつつありますが、そういった関係の中で日本とタイはどのような付き合いをしていくのかということですね。もう一つは電子部品です。AIに使う、クラウドに使うといったようにチップの役割がさらに大きくなっています。PCB（プリント基板）関係とかチップ関係などで最近日本からの新たな投資がタイにあります。その時々技術の展開によって、こうした投資の状況は変わってくるのではないかと思います。ですから自動車についての需要は下がってくるのではないかと思います。

—— プラユーンさんのように国を支える人材が日本留学生の中から出ているのは嬉しいことです。

やはり歯を食いしばってやってきたから出来たことだと思います。計量研究所も私が入った時は経済危機の1年目で予算局へのお金の要求はほとんど通らなかった時です。人件費はなんとかなくても、設備の購入までは考えられない。そこでJBIC（国際協力銀行）に借金を申し込

んだのですが、TPIを作った時のコネクションがなかったら、それも考えられませんでした。旧知の関係者の方々がいろいろ尽力してくれました。当初の予算だけでも食べては行けましたが、そこにいるだけで、一歩も先に進んでいくことはできなかったと思います

一番つらかったのは、JBICからの貸付の可能性がわかったあとの政府機関への説明でした。大蔵省の委員会に借金をしたいと説明に行ったのですが、この時はかなり怒鳴られ

ました。今タイはこんな時なのになぜまた借金をするんだと。私は今、こういう時だからこそ、産業の基礎となる計量がいかに大切かということを訴えました。そして、なんとか許可を得たのですが金額は10億バーツ（当時のレートで31億5000万円）です。日本との関わりがなかったらありえなかった。建物と機材、そしてそれらに加えてJICAの技術支援がありました。日本から指導員を派遣してもらったり、タイの若い人を日本に派遣して研修をしてもらったりしました。それらがなかった今の計量研究所はありません。

第二期では、化学だけの建物を作りました。最初は機械と電気関係の計量でしたが、最近は化学も重要になっていますから、毒や黴菌の計量も行っています。以前の実績がありましたから、その時はタイ政府から7億バーツ（当時レートで22億2600万円）ほどが出ました。その結果かなり東南アジアの中でも立派な機関になったと思います。

—— 貴重なお話をありがとうございました。これからもタイと日本の架け橋として、ご活躍いただけることを期待しております。

コロナ禍の前後における外国人留學生数の推移

国・地域別分析

公益財団法人アジア学生文化協会 白石勝己

在籍留學生数と「留学」新規入国数

本年5月、文部科学省より2023（令和5）年5月1日現在の外国人留學生数が発表され、それによれば日本で勉学する留學生数は28万人であった¹。2019年には留學生30万人計画の目標値を達成し、312千人となったが、2020年当初より世界的に広まったコロナ禍による出入国制限により、日本の外国人留學生数も2022年には

23万人まで減少することとなった。

当誌では年ごとの特徴を持つ動きを明瞭に把握するため、文科省が例年発表するストック統計グラフ（図表1）に加え、出入国管理庁による各年ごとの「留学」ビザで新規入国した数²（図表1赤棒グラフ、フロー統計）を重ねて作表し分析することとしている。



2011年東日本大震災と福島原発事故で減少した留學生数は、2019年に31万2千人にまで増加し、目標年である2020年を待たずして2019年に留学

生30万人計画が達成されることとなった。しかし、2020年初頭から始まった世界的なコロナ禍により、海外との人の出入りは全面的に制限される

1. 外国人留學生在籍状況調査 独立行政法人日本学生支援機構 <https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/enrollment/>

2. 出入国管理統計表 出入国管理庁 https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_nyukan.html

こととなり、「留学」ビザで12万人が新規入国した2019年から、2020年には6万4千人と半減し、さらに2021年は1万2千人まで減少することとなった。しかし、3年間続いたコロナ禍も2022年中にはすべての道府県で蔓延防止策が終了した。日本政府はコロナ禍の動向を見つつ、2022年10月より入国時の水際措置見直しを行い、外国人留学生の入国数も徐々に回復することとなった。これを受け、日本留学の足止めを食っていた入国希望者が一気に入国することとなり、2022年の新規

「留学」入国者数は歴代最高の16万7千人となった。ストック統計である留学生数（各年5月1日現在）も2022年の23万1千人で下げ止まり、2023年には27万9千人へと増加に転じている。ただ、ここで伸びている数は日本語学校の留学生数（22年4万9千人→23年9万1千人）であることに留意が必要である。高等教育の留学生数が増加するには2023年に増加した日本語学校生の進学を待つこととなり、あと1～2年かかることとなろう。

国・地域別留学生数の推移

さて、国・地域別での留学生数を見ると、中国11万5千人、ネパール3万8千人、ベトナム3万6千人、韓国、台湾が上位の国・地域となり、全体の75%を占めている（図表2）。コロナ禍を

挟んで留学生数の推移については、それぞれ国・地域ごとでの特色が現れているので、次にそれらを見ていきたい。



中国

中国の留学生数が占める割合は全留学生の58%（2013年）から41%（2023年）に減少しているものの、この10年間、学生実数としては10万人～12万人と安定しており、外国人留学生受入れの中軸となっている。コロナ禍直前の2019年がピークとなり12万4千人であったが、

2022年には日本語学校、高等教育機関合わせて2万人減の10万4千人となった。しかし、2023年には日本語学校生が1万人増加しており、今後、これらの学生が高等教育機関へ進学することが考えられ、その総数もほどなくピーク時の12万人を超えるものと思われる。

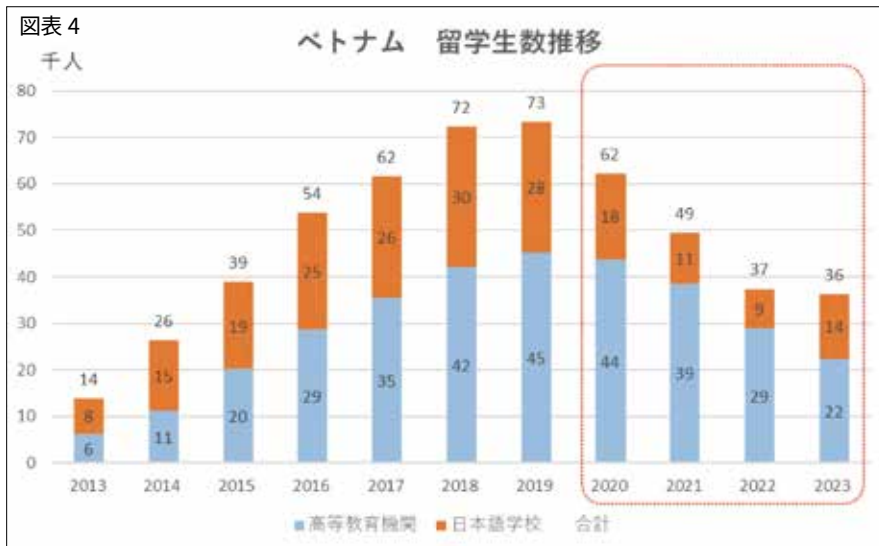
ダイバーシティーや安全保障貿易管理などの観点から、中国人留学生ばかりが増えることに危惧を持つという面もあるが、教育的質（勉学・研究能力）や言語（漢字圏）、財政面からも優位性が高いこともあり、長期的な観点を持ちつつ、現状

に惑わされないしっかりした受入れ方針を立てる必要がある。

外交上あるいは国内外の経済状況や災害など大きな変動がなければ、今後も漸増傾向は続くものと考えられる。



ベトナム



ベトナムからの留学生はピークとなった2019年の7万3千人から、コロナ禍期間を過ぎた2023年に入っても減少続け、3万7千人、50%減となった。2022年、2023年で数を回復させている他の

国・地域とは様相を異にしている。その原因を探るべく、他の在留資格に流れていないか、特定技能ビザ、技術・人文知識・国際業務ビザなどの動向を調べたが、特に論拠となるところは見いだせ

なかった。この数値の変化について、ベトナムの教育関係者にヒアリングしたところ、ここ数年ドイツ留学、韓国留学が増えており、そちらに移っ

ている可能性があるとの話だった。今後、どのように変化していくか現地での調査も行いつつ、注視していく必要があるだろう。

ネパール



ネパールからの留学生はコロナ禍前の2019年には2万6千人であったが、コロナ禍期間中2021年には1万9千に減少した。しかし、2023年には3万8千人へと2.8倍へと急増している。この段階で、ネパールの留学生数が中国について、第2位となった。ただし、その内訳を見ると増加しているのは日本語学校生の2万3千人(2023年)で2019年の8千人から3倍の増加である。これは、ネパール側のプッシュ要因と日本側のプル要因双方の要素が考えられる。日本側のプル要因は日本語学校がベトナムで落ちた数を、元々海外出国圧力(プッシュ要因)が高く集客しやすいネパールへとシフトしたためであろう。国内日本語学校と連動した現地留学代

理店のリクルート活動が活発化したためと推察される。

しかし、ネパールの一人当たりの所得は1,320USドル(約20万円/年2023 IMF)で外務省のデータでも後発開発途上国(LDC: Least Developed Countries)に分類されている³。本国からの仕送りはほぼ見込めないため、すべての留学・生活経費を来日後のアルバイトで賄うこととなる。日本語学校の間は、ぎりぎり日常生活は維持できたとしても、次の段階となる専門学校・大学に進学する時に必要となる経費(学費、入学金等)が不足することとなる。このような地域からの留学生誘致は不法就労を招くなどリスクが高くなると言わざるを得ない⁴。

3. 外務省ホームページ https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/ohrls/ldc_teigi.html

4. 【財政モデル】 収入: アルバイトのみフルで1,000円×28時間/週×4週=112,000円/月。支出: 学費60,000円/月 家賃・食費・通信費・交通費等50,000円/月とすると、日々の生活はギリギリ維持できても、進学のための学費は捻出できない。さらに来日時の経費を母国で借金し、返済金がある場合は経済的に成り立たない。

韓国



韓国からの留学生数はここ10年、1万5千人前後で推移していたが、2019年に1万8千人でピークとなりそのうち約2千人が日本語学校生となっていた。コロナ禍で2021年には1万3千人まで減少したが、2023年からは若干の増加傾向へ転じている。しかし、図表7で見る通り、近年は日本語学校で学ぶ韓国留学生は統計概要には乗らないほどの数となっている。

一方、日本への入国者数が最も多い国は韓国(680万人)であり、その99.5%は短期滞在(査証免除 90日以内)である。これらの中には学びたい時期に短気で来日して、日本語学校で勉強している者も一定数いるものと推測される。大学等への進学のための長期的な日本語学習はもっぱら

韓国内にある日本留学専門の塾で行われるようになっており、コロナ前の2019年にはソウル会場、釜山会場を合わせた日本留学試験受験者数は約1万人となっている⁵。

韓国における大学入試である「大学修学能力試験」の厳しさはよく知られており、大学卒業後、特に文系では就職も難しいと言われている。そのような状況を嫌って、高校の1～2年の段階から、日本留学を目指し日本留学試験のための準備を開始する層が一定程度存在している⁶。そのような状況から、韓国からの留学生も中国と同様、外交上あるいは国内外の経済状況や災害など大きな変動がなければ、今後も留学生数は漸増していくものと考えられよう。

台湾

台湾からの留学生数は2018年まで順調に10%程度の伸び率を確保していたが、2019年から2021年までのコロナ禍で半減することとなった。2023年に入りようやく回復傾向が見られた。台湾の傾向が韓国と異なるのは、常に20%程度、日

本語学校へ留学する層が存在する点であろう。韓国では日本留学試験の予備校が存在し、高いレベルの日本語教育が受けられるが、台湾にはそのような日本留学受験予備校の存在は聞いたことがない。台北で日本留学試験が実施されているが、そ

5. 「アジアの友」553号 日本留学試験実施団体釜山韓日交流センター チャ・ドンヨブ氏提供資料 2019年日本留学試験第1回受験者4,739人 第2回受験者5,139人

6. 同上

の受験者数は2019年で181人、直近の2023年でも132人とどまっている⁷。台湾の大学進学率は81%（2019年）であり⁸、大学卒業後の就職状況も日本とは異なり転職を重ねてキャリアを積んでいく形であるため、出身大学より業務経験で

獲得した能力が重視される傾向があるとされる⁹。高等教育への進学率が高い隣国・地域であっても、韓国と台湾の日本留学に対する需要は異なった側面が観測されるといえよう。



ミャンマー

2023年度、JASSO発表の留学生数ではミャンマーは7,773人となり台湾の6,998人を抜いて第5位になっている。このミャンマーの留学生数の推移も見ておきたい。ミャンマーの留学生数の傾向は、その総数は異なるもののネパールの留学生数の推移と非常に近い形状を示している。もともとネパールの学校教育制度では後期中等教育修了まで12年の学校制度となっており¹⁰、高等教育への入学に12年の学校教育学歴を求める日本の教育制度との接続は確保されていた。

一方、ミャンマーの教育制度は初等教育5年（5歳入学）、前期中等教育4年、後期中等教育2年の11年制であり、かつその修了年齢は16歳であっ

たため、日本の教育制度とは接続していなかったのである¹¹。しかし、2016年12月、文部科学省は海外における中等教育修了後、現地の高等教育へ接続していることということを要件として、ミャンマーにおける後期中等教育（アテッタン・アシン・ピンニャーイェー）修了試験の合格をもって、日本の高等教育への入学資格を与えるという制度変更を行った。この措置は外国において、後期中等教育を修了し現地高等教育に接続しているという外形のみをもって、日本の高等教育への入学資格を与えるというものであり、その教育の質には判断の基準を置いていないことに留意が必要である。

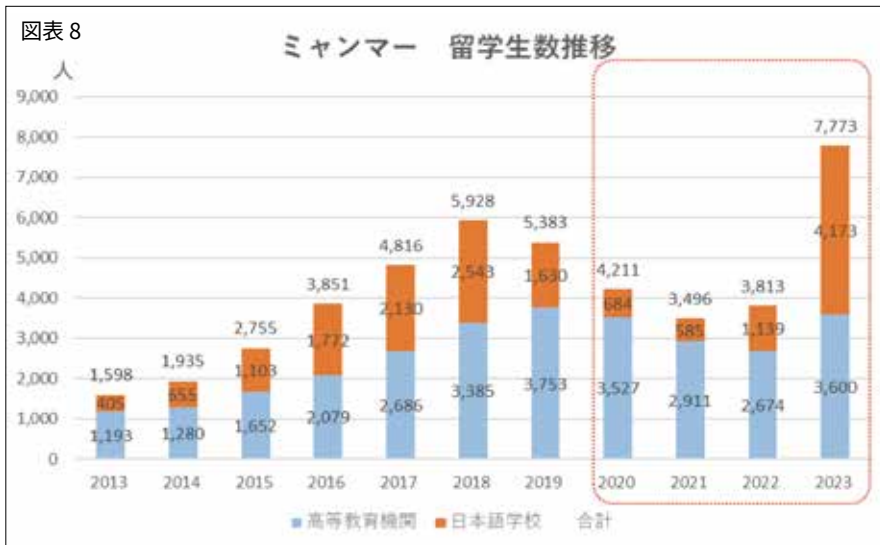
7. 日本学生支援機構 <https://www.jasso.go.jp/ryugaku/eju/about/data/inquiry/2019.html>

8. 日本貿易振興機構（ジェトロ）国際ビジネス人材課資料 2021年3月 https://www.jetro.go.jp/ext_images/_Reports/02/2021/4a82901cfb8a288a/202103.pdf

9. アジアの若者と働き方の未来 カントリープロフィール：台湾 臺灣亜州交流基金會 https://kas-japan.or.jp/wp-content/uploads/2022/05/FOW_Taiwan_JP.pdf

10. 文部科学省「世界の学校体系（アジア）」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/attach/1396848.htm

11. 同上



このような措置もあり2018年まで毎年1,000人を超える増加を示すこととなった。2018年から2019年にかけて日本語学校におけるミャンマーの学生数が2千5百人から1千6百人に減少しているが、その要因は入管当局による在留資格認定証明書発給の厳格化によるものであろうと推察される¹²。

コロナ禍で2020年～2022年まで制限された日本への入国が2023年に解禁され、日本語学校の留学生数は1,100人から4,200人へと急増した。ここにはコロナ禍によって日本留学希望者がストックされたというだけでなく、2021年2月にミャンマーで起こった軍事クーデターも大きく関係していると考えられよう。2024年2月には軍事政権が徴兵制を実施すると発表しており、その後に行われたタイの大学の入試にミャンマーからの受験生が殺到した、というニュースも流れた。

ミャンマーも、ネパールと同様、一人当たりのGDPは1,100ドル（約16万円/年）ほどの後発開発途上国であり、日本語学校から高等教

育進学という経路は、学費も生活費もアルバイトで賄うには無理があり、大学等への進学資金不足に陥る可能性が大きい。しかし、現地の大学を卒業した者が、日本語学校を経由して直接日本で就職（技術・人文知識・国際業務ビザや特定技能ビザを取得）するルートは、財政計画をしっかりと立てれば、決して閉ざされているというわけではない¹³。

現在、ウクライナに対しては40校以上の日本語学校有志が「ウクライナ学生支援会」という組織を作って、日本に避難したウクライナの避難民に対し、日本語教育の無料提供を行っている¹⁴。同団体のホームページには「長期的にウクライナの復興支援に貢献できる。」と謳っていて、留学生の受け入れはこのような民間外交の主役としての役割も担うことができることを示している。外国人留学生誘致にあたっては、個別の国・地域の状況、情勢分析を行いつつ、適切な実施計画を立てる必要があるだろう。

12. 一般財団法人日本語教育振興協会は、会員校約200校に対し在留資格認定証明書の申請数と発給数の調査を行っているが、一般公開はしていない。

13. 注2参照

14. ウクライナ学生支援会 <https://www.jsus.info/>

大切なのは日々緊張感を持って目標に向うこと

賽夫 (SAI FU) ～中国 内モンゴル自治区

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科 スポーツ科学専攻 スポーツ組織論研究室 (博士課程)

総合型地域スポーツクラブって？

私がいま博士課程で研究しているのは、総合型地域スポーツクラブ (総合型クラブ) についてです。

それって何？と聞かれることがあります。総合型クラブは全国に3500以上ありますから、みなさんの地域でも活動を行っているかもしれません。総合型というように、地域住民が主体的に運営し、多目的・多世代・多志向という特徴を持ち、様々な活動が行われています。例えば教室にはサッカーやバレーなどのスポーツだけではなく、書道や音楽などもあり、子どもからシニアまで地域の誰もが自由に参加できます。

総合型クラブの原形は、ヨーロッパのコミュニティスポーツクラブなのですが、そちらはより自立的で独自の施設を持っており、会員資格に

ついても厳格に定めされているところが多いです。日本の場合は、自治体など行政の支援を受けながら、施設も公共の場を利用しているケースが多く、会員になる際も特別な条件は求められません。つまり、より公共福祉に貢献する



という側面が濃く自治体との連携も強くなっています。

私は中国の大学ではジャーナリズムを専攻していたのですが、日本で大学院に進学するにあたって、自分の関心が

ある分野で、なおかつ日本ならではのものは何かと考えました。私はスポーツが好きで、大学時代には友人と水泳教室を開いて地域の子供たちに教えていた経験があったこともあり、この総合型クラブの活動に関心を持ち、それが地域の人々の生活にどんな影響を与えているのか、その発展の可能性などについて研究してみたいと思いました。

今は様々なクラブを巡って、インタビューを行うなどの調査を行っていますが、総合型クラブの経営課題はまさに「ヒト、モノ、カネ」で、経営資源の面から現状は厳しいというのが大枠での結論です。

そこで、私の修士論文では、可能性のある解決策の一つとして、クラブ同士の連携を挙げました。現状、総合型クラブと他の組織との連携はあるのですが、クラブ間で連携しているケースはなく、私はい



総合型クラブで実習中



留学生仲間と早慶戦を観戦（神宮球場）

いくつかのシミュレーションを通じて、そこに可能性があるということを証明しました。

現在、マネジメント面についての研究もしていて、例えばダイバシティのマネジメント、つまり性別、障がい、人種を問わず、様々な人たちの視点やアイデアを活用することで、より掘り下げて問題を解決できるのではないかと考えています。

私のAI利用法

今話題のAIですが、私の研究生活には欠かせないものになっています。いくつかのキーワードをあげて必要な論文を探してもらい、その論文の要点をまとめてもらうことで、たくさんの資料の中からどれが自分に必要なものなのかを探し出します。膨大な時間を費やして論文を読んだけど、結局求めるものとは違ったということが減ることで時

間の節約になりますし、今までは埋もれていて出会えなかった資料に出会えることもあります。

もっとも頭からAIを信じてしまうのは禁物です。たとえば、海外のこんな論文を探して欲しいと頼んで、結果提示された本が、実在するものではないこともあります。書かれたはずの年代にその論文の著者が存在していなかったり、本のタイトルが別の料資のものであったり…。それが信頼できる情報なのかどうか、自分で判断ができないのならAIの使い方は考えるべきですね。

例えば私は、調べたいことに関するキーワードを15個AIに求め、提示されたキーワードから自分が関心のあるものを選び、そのキーワードの意味となぜそれを選んだのか、その理由を聞くことで、最終的に自分が必要とするものを絞り込むという使い方を

しています。つまり直接答えを求めるのではなく、アドバイス、ヒントをもらう相手としてAIを利用しています。こうした使い方は自分がどんな専攻を選べばいいのか、どの学校に行くべきか迷っている際にも役立ちますね。

日本留学成功の鍵は

日本留学で何よりも重要なのは日本語です。できるだけ話す相手を探して日本語で話す。話す時は書く時より早い頭の回転が求められますから、話す相手がいなくても毎日声に出して話すことが大切です。そして有名大学を目指すのなら、最低でもN1（日本語能力試験）が必要で、そこがスタートラインです。私は日本語学校を探す時、中国人が少ないことを第一条件に挙げてABK学館に入りました。その結果、私のクラスに中国人は私一人だけでしたから、クラスメー



日産スタジアム（横浜）で日中のサッカー・クラブ間対決を観戦

トとの会話はいつも日本語で、この環境は本当に日本語の上達に役立ちました。

そして、目標を早く決めて準備を始めること。私の場合は東洋大学の修士課程に入学してすぐに博士課程はどこで学ぶかを考え、希望する研究室を見つけて先生に連絡をとりました。そして修士の研究をしながら博士進学に必要な課題の準備を行いました。早くに目標を決めて準備を始めれば、成功の可能性は高まります。

夢を叶えるために

私は将来、日本の大学で教員になるのが夢です。もし大学がだめでも日本で研究者として働きたいと思っています。集中して考えること、勉強が好きですから、自分にはそうした仕事に向いているのではと思っています。

私のように中国の小さな街

から日本に来て住んでみると、教育の質も社会保障も給与も、日本は様々な面で優れていて、安心して過ごせるところだと感じます。だから出来るのならここでずっと生活したいと思っています。



日本に来て、修士に入れなかったら博士に進むことはできませんでした。そして博士論文が完成しなければ研究者への道も開けず、日本に永住する夢はかないません。時間はどんどん過ぎていきますから、目標達成までの期限を決めて、その緊張感を持って、

いま日本での留学生活を送っています。

ところで私は内モンゴル自治区出身のモンゴル族ですが、小学校からずっと中国語で教育を受けてきましたから、モンゴル語は話せません。それでも普段の食生活や歴史の知識などから、30%くらいはモンゴル人のアイデンティティーを有していると思っていました。ところが日本に来て、日本語学校でクラスメートになったモンゴル人は完全に外国人でした（笑）。やはり言葉が異なるのは大きいですね。ただ、僕の名前はモンゴル人のものですし、チンギス・カンや食事、服装など共有する文化、知識もありますから、彼らからは「親しみやすい」と言ってもらえ、今も仲良くしています。日本に来たことで、そんな出会いがあったことにも感謝しています。

新星学寮での生活

(第14回)

新星学寮はアジア学生文化協会の創設者である穂積五一先生が1932年に再興した至軒寮を戦後(1945年)改称したものです。以来日本とアジアの青年学生が自治的な共同生活を通じ、相互理解を深め友愛を培う場として維持されてきました。しかし老朽化が進んだため、2018年に耐震性・耐火性を備えた建物に建て直されました。建替えに当ってはOB・OG・関係者の皆様から多大なるご協力をいただき、2019年4月に新入寮生を集め新たなスタートを切ることができました。本コーナーでは寮生へのインタビューを中心に新星学寮の今をお伝えします。

日本人寮生に聞く新星学寮の生活

太田美蘭さん (日本) 専修大学商学部マーケティング学科3年生

今回登場いただくのは、大学生になると同時に新星学寮に入寮し、3年目となる今年は寮長も務める^{おたみらん}太田美蘭さん。お父様がタイの方であるにも関わらず、入寮まで海外との繋がりを意識したことはなかったという美蘭さんが、新星学寮でどんな経験をし、どんな成長を遂げたのか。お話を聞きました。

—— 新星学寮との出会いを教えてください。

新星学寮は母がABKのホームページから見つけて教えてくれました。私の実家は東京なのですが、大学生になったら実家を出て暮らしてみたいとなんとなく考えていたんです。それで、本当に軽い気持ちで見学に行ってみたのですが、結局他の寮と比較することなく決めてしまいました。

—— 留学生との共同生活を希望していたのですか。

そこはまったく考えていませんでした(笑)。ただ、いきなりの一人暮らしは寂しいだろうし、私は一人っ子なので、大勢で暮らす経験もしてみたいと思っていました。それで母は大学に近い寮ということで探してくれていたんですね。

—— 即決した理由はなんですか? どのところが魅力的だったのでしょうか。

印象的だったのは見学の日、寮生の人たちがとても温かく迎え入れてくれたことです。特に案内をしてくれた亀山泰さんは本当に面白い人で、しかも偶然同じ大学の先輩で、この人と一緒なら安



タイ訪問中



成人式。振袖姿で

心かなくて。見学の帰りには、入寮したら両隣に住むことになるマレーシアとタイの留学生2人と近くの駅まで歩いたのですが、2人とも親切で面白くて、純粋にこの人たちと仲良くなりたいと思いました。だから寮の場所や設備というよりも、寮生の人間性に惹かれたという感じですね。

—— お父様はタイの方ということですが、外国への興味というのはなかったのでしょうか。

実はこの寮に入るまで考えたことはありませんでした。子どもの頃から年に一度はひと月ほどタイの祖父母の所に行っているのですが、それは同級生が国内の田舎に帰省しているのと同じような感覚で、自分が外国との繋がりが深いといった気持ちを持ったことはありませんでした。ただ、この寮に入ってから海外への興味が湧いてきて、同じキャンパスに国際学部があるのですが、あっちに入っても良かったかなあという気持ちにはなっ

ていますね（笑）。

—— 新星学寮に2年間暮らしてみてもの感想はいかがですか。

とにかく“楽しい”と感ずることがほとんどです。寮でしか出会えない、大学ではなかなか出会えない人たちと一緒に暮らし友人となり「ただいま」、「おかえり」と言い合える関係があることに嬉しさを感じます。

また、いま寮長をやらせてもらっていて寮会では司会をしているのですが、様々な案から一つを選ぶのが司会の仕事ではないと思っているので、どうみんなの意見を反映させつつ、より良い答えを導き出せばいいのか、そこは難しいなと感じているところです。

—— これまで暮らしてきて、寮の制度などで改善したいと感じることはありますか。



大学ではダンスサークルで活躍



寮の仲間との日光旅行（2024年2月、右2人目）

以前会計係をしていた時に感じたのですが、寮費がどのように使われているのか、どんな支払いが増えているのかということをもっとみんなに意識して欲しいと思います。私は毎月の光熱費を見て、もっと抑えなければという気持ちがあるので、この気持ちをみんなにも共有して欲しい。そうやって少しずつでも節約すれば、旅行などの行事にお金を回すことが出来ます。だから、収支、経費に関しての情報をみんなにわかりやすく周知できるようなシステムがあればと思っています。

——自治寮ということで、そういった煩わしさも発生するわけですが、その点はどう考えますか。

大変ではありますが、私は今の運営形態がベストだと思っています。最近の寮長としての大きな仕事で、本則の見直しをしたのですが、以前の本則には「寮執行部を作り、執行部が決めたことを寮会で話し寮生の承認を得る…」と書かれていました。仮に5-6人の執行部を作っても新星学寮の寮生は14人ですから、それほどの人数差はありません。もし100人の寮であれば違うと思いま

すが、14人であれば全員で議論ができる。全員が自分の意見を出しながら物事を決めていく、作って行けるのがこの寮の良さだと思っています。

——これまでの寮の生活の中で自身の成長を感じることはありますか。

きちんと自分の意見を言えるようになったことが一つですね。最近の若者は「友達なら意見は一緒が当たり前」という風潮がありますが、私も高校生の時は友達の意見についていくことがほとんどでした。でもこの寮に入り、さらに寮長になってみて、自己をしっかり持っていないと、すぐ他の人に揺さぶられてしまう。大切な暮らしの場の決まりごとがいつの間にか決まってしまうのは嫌ですから、そこは本当に大切なことだと思います。

そして、それを言葉にするのも自分にとって勇気のいることでしたが、他の人に負けないように口に出してはっきり自分の意思を伝えないと、寮してもらうことを期待することが出来ない世界ですから（笑）。それができるようになったという



寮生全員が参加した北海道旅行（2024年2月、後列中央）

寮では普通の学生生活では、出会えないような個性的な人たちが集まってお互い異なる意見をぶつけ合いながらも険悪になることなく共同生活をしています。そうした中で私自身、文化の違いや年齢差を乗り越えて相手を理解するという力が高まったのではと感じています。そういったところは、社会に出て必ず役立つのではと思っています。

—— 異文化とともに年

齢差という壁も乗り越えたわけですね。

のは、すごく成長した部分だと思います。

—— では寮生活で今楽しいこと、これからやってみたいことなどがあれば教えてください。

食事会で留学生が振る舞ってくれる各国料理を食べながら、いろんな話をしていると、なんだか国際交流しているなあという実感が湧いてきて楽しいですね（笑）。また最近は韓国人のソンさんが韓国語講座をしてくれているのですが、教え方が上手で面白いので毎回参加しています。

私は今、金融機関でインターンをしているのですが、投資信託とかNISAのことなどを学びながら、自分の将来にも繋がりたいと思い仕事をしています。そういったお金のことについては寮のみんなも少なからず興味があると思うので、私も機会があれば資産運用に関する講座を開くなどして、みんなの役に立てたらいいなと思っています。

—— 寮費も運用で増やせるといいですね。ではこの寮での生活が社会に出た時にどのように生きてくると思えますか。

この寮に入る時、学生寮は学部生の人を中心だと思っていたのですが、入ってみたら大学院生の人ほとんどでびっくりしました。それで最初は自分で壁を作ってしまったようなところがあったのですが、今はその壁をまったく感じません。逆に仲が良いのは歳の離れた人達です。大学では同じ年齢の友人ばかりですから、自分たちとは違う発想ができる彼らと話すのがとても新鮮なんです。私は漠然と大学卒業後の将来について不安を感じていたのですが、彼らは既に進学や留学という不安を乗り越えてここまで来ています。そんな人たちと話していると、生き方は一つじゃないんだって。そう思えて勇気が出てくるんですね。

—— ありがとうございます。寮の発展と共に美蘭さんのこれからの期待しています。

新星学寮ブログ（募集案内等）
<https://www.shinsei.haus>

バンコクの泰日工業大学で活躍するスタッフ&先生によるリレーエッセイ

泰日工業大学 (TNI) 奮闘記

水谷 光一

⑤ グローバルコミュニケーション学部が誕生

タイ国政府観光庁（TAT）によると2023年の日本人の訪タイ者数は80.5万人であった。新型コロナウイルス感染症騒ぎが始まる前年、2019年が180万人だったことを考えると、この減り具合はどうしたことなのか。ちなみに中国350万人、韓国170万人とのことで、いかに日本人が少なかったかがわかる。

今年（2024年）初め、タイ政府は日本からの訪タイ客数を87万人と予測していたが、6月には100万人引き上げた。これは根拠があつてのことというよりは、TATの目標、いや希望とする数字だと言えるだろう。やはり今年のゴールデンウィーク期間中も日本人の姿は少なかった。

一方で2022年に大きく落ち込んだ直接投資だが、2023年には持ち直している。

日本人観光客から見ると今のタイは「手軽に

安価で行ける国」ではなくなっているのではないだろうか。物価の高騰に円安が重なり、ホテルも食べ物も高く、かつてのように「一か月5万円のノマド生活」を目当てにタイに来るような人はいなくなったと感じている。

そうした中、TNIでは今年新たに「グローバルコミュニケーション学部」を開設した。

以前からTNIには「日本語学科」開設への要望が多かったが、「工業大学」という性格上、簡単に話は進まず、日本語専門コースに関する案は立ち上がっては消えを繰り返していた。

日本語については、各学部での授業ではもちろん、2018年にできた英語で学ぶ国際ショナルプログラムの工学・情報・ビジネス分野のコースでも教えていた。さらに2022年にはここにピ



日本のモノ、日本風が人気の一方、日本人を見かけなくなったバンコク繁華街

ビジネス日本語が学べる日本語 - 国際ビジネスコース (JIB) を試験的に加え、卒業時には技術系の卒業証書ではなく、文科系の学士学位 (Bachelor of Arts) を授与できるようにした。ただし、TNIには文学部も言語学部もないので、その位置づけは曖昧ではあった。

そうした紆余曲折を経て、TNIは今年2024年6月に、2007年の創立以来17年ぶりの新設学部「グローバルコミュニケーション学部」を開設し、JIBをここに移設した。この学部では日本語と英語を軸に、TNIが目指すところである“国際分野で活躍できる人材”を育てることを念頭に置いている。

今年の第一期生募集には当初の予想を上回る応募があり、最終的に1クラスを増設し、2クラス体制(計80名)でスタートすることになった。

単純に「日本語学部」といかない背景には「日本だけに頼っていいのか?」という課題もある。筆者は大学の日本人職員の立場として、泰日工業大学の卒業生は全員お世話になっている在タイ日系企業、もしくは日本の日本企業に就職してもらい貢献して欲しいと思っているが、進出日系企業数も頭打ちとなっており、日本人観光客数も当面増加しないのではと考えると、将来学生には国や地域を問わず仕事ができる人材となってもらうのが望ましい。TNIで学んだ日本語力を活用して、グローバルに活躍してもらえれば良いのである。

「日本のものづくりの精神と技術」、そして「日本語」を活かしたタイ社会、日本社会、国際社会に貢献できる人材を創る泰日工業大学は常に躍進している。



<https://gc.tni.ac.th>



※ TNI 大学創立時からの3学部

- ・工学部 {自動車、ロボティクス&リーン、電気、コンピュータ、IE} の各コース
- ・情報工学部 {IT、マルチメディア、ビジネスIT、広報デジタル} の各コース
- ・経営学部 {スタートアップ、日本語、国際、会計、観光、ロジスティック、人的資源管理、デジタルマーケティング} の各コース

水谷光一(みずたにこういち) 1990～1996年 TPA で非常勤講師、1996～1999 渉外課長。
1999～2004 ABK 勤務。2007年から泰日工業大学(TNI)勤務。

Event & Festival

第7回 教職員のための外国人留学生就職支援研修会

テーマ：留学生のキャリアデザインをどう考えるか

この研修会は、「外国人留学生の就職」に様々な立場で関わる学校関係者が集まり、最新の就職支援の在り方について学び合う研修会で、今年で7回目を迎えます。キーノートスピーチや企業関係者によるパネルディスカッションを通して、企業が従業員のキャリアデザインをどう考え、どのような人事施策をとっているのか、最新の動きをご紹介します。

日時：2024年7月27日（土） 13:30～17:30（受付13:15～）

会場：国士舘大学 世田谷キャンパス 34号館A207教室

※ZOOMで中継あり。ZOOM参加の方は、グループディスカッションの時間も含めて視聴のみとなります。

参加対象：外国人留学生の就職支援に関わる教職員、これから関わりたい・関心がある教職員

定員：会場参加50名、ZOOM参加定員なし

参加費：無料

申し込み：<https://kenshuukai.jimdofree.com>

主催・問合せ：「留学生就職支援研修会事務局」(株)ASIA Link 内 担当：相馬、小川

TEL. 042-312-1074 E-mail. campussupport@asialink.jp URL <https://www.asialink.jp/>

第23回 阿佐ヶ谷バリ舞踊祭

「万華鏡の庭 Kaleidoscope Garden」

バリの古典舞踊や地域の芸能、近年創作された最新のバリを伝える踊りまで、バリ芸能の縦横に広がる世界を披露。インドネシアのビールや飲み物、軽食を販売する屋台も出店し、楽しさ満載の阿佐ヶ谷バリ舞踊祭。

日時：8月3日（土）、4日（日）

両日17時開演（16時開場）※雨天決行

場所：阿佐ヶ谷神明宮境内 能楽殿

（東京都杉並区阿佐谷北1-25-5）

JR阿佐ヶ谷駅北口徒歩2分

主催：阿佐ヶ谷バリ舞踊祭実行委員会

<https://asabalidance.wixsite.com/asabali>

台湾フェスタ 2024 in 代々木公園

台湾の夜市をテーマに、活気あふれる屋台や美味しい食べ物、そして台湾の伝統的なお祭りや文化体験、パフォーマンス。

日時：7月26日（金）、27日（土）、28日（日）

開場15時 終演22時（28日のみ21時）

会場：代々木公園野外音楽堂広場

主催：一般社団法人台湾フェスタ実行委員会

<https://taiwan-festa.com>

ベトナムフェスタ in 神奈川 2024

来場者の皆様に参加して、交流しながら、ベトナムの文化や魅力を存分に感じられるプログラムを多数用意し、未来に向けて、神奈川県とベトナムとの交流や絆がより深まっていくことを目指しています。

日時：2024年9月7日（土）、8日（日）

10時～18時

場所：日本大通り／神奈川県庁本庁舎／

象の鼻パーク / 象の鼻テラス

主催：ベトナムフェスタ in 神奈川実行委員会、駐日

ベトナム社会主義共和国大使館、神奈川県

問合せ：ベトナムフェスタ in 神奈川 2024 運営事

務局（(株)クリエイティブアローズ内）

電話：080-4936-9377

（月曜日から金曜日10時から17時）

<https://www.pref.kanagawa.jp/osirase/0215/vietnamfesta/index.html>



奨学金情報

奨学金情報は Japan Study Support (JPSS) web サイトで検索いただけます。
募集の詳細については必ず各実施団体のホームページ等でご確認ください。

公益財団法人 渥美国際交流財団 2025年度奨学生

■主な応募資格

日本の大学院の博士（後期）課程に在籍し、2026年3月（秋入学は2026年9月）までに博士号を取得する見込みのある方。在籍する大学院研究科（研究室）と居住地の両方が、関東地方（東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、茨城県、栃木県、群馬県）にある方。日本語が堪能な方（応募書類と面接は日本語のみ）

■支給金額 月額 25万円

■支給期間 1年間（2025年4月～2026年3月、または2025年9月～2026年8月）

■募集人数 16名（ただし同じ出身国／地域から5名まで）

■応募方法 主催団体に直接申し込む（ホームページから申込用紙をダウンロード）

■応募期間 2024年9月2日（月）から9月30日（月）

■主催者連絡先

東京都文京区関口 3-5-8

Tel 03-3943-7612

E-mail atsumifoundation@aisf.or.jp

URL <http://www.aisf.or.jp/jp/>

公益財団法人 ロームミュージックファンデーション奨学金

■主な応募資格

日本国籍を有し、国内外の教育機関で音楽を学ぶ方、または外国籍を有し、日本の教育機関で音楽を学ぶ方（入学を予定している方も応募可）、実技審査および面接日（京都市内にて2025年3月5日、6日開催）にいずれも出席可能な方、年齢不問

■支給金額 月額 30万円

■支給期間 原則1年間、2025年9月～2026年8月（更新は1回まで可能）

■応募方法 Web サイトより申請

<https://www.rmfm.or.jp/jp/recruitment/scholarship/>

■応募締切 2024年9月5日（17:00まで）

■主催者連絡先

京都府京都市右京区西院西溝崎町 44

Tel: 075-311-7710

URL <https://www.rmfm.or.jp/jp/>

イベント情報

IFSA留学生川柳2024 川柳であなたの想いを伝えてみませんか？

【川柳とは？】五・七・五の音を持つ日本語の定型詩です。俳句のように、「季語」や「切れ」を入れないといけない、という決まりはありません。字余り（五、七、五よりも文字が多くなること）でも大丈夫です。

【募集概要】①テーマは特にありません。留学生、若者の感性で自由に考えてみてください。②未発表オリジナルの自作品に限る。③応募は1人5作品まで。④重複投稿や既に発表されているものに著しく類似した作品は除く。

【応募対象】応募する時点で、在留資格が「留学」で、2023年10月中は日本に在住している留学生

【応募方法】WEBサイトの専用応募フォームから、送信してください。

<http://www.ifsa.jp/index.php?senryu2024>



【募集期間】2024年7月1日（土）～8月25日（日）23:59

【賞品】図書カード 金賞（1作品）2万円分 銀賞（2作品）1万円分 銅賞（5作品）5千円分
佳作（複数作品）千円分

【結果発表】2024年10月1日 IFSA ホームページ上、および、向学新聞10月1日号紙面上にて発表

【問い合わせ】国際留学生協会（IFSA）向学新聞編集部 kokusai@ifsa.jp

MEMBERS

《会費とご寄附の報告》

2024年1月

賛助会員

西川 恵 中央区

正会員

(2口)
赤松 茂利 小田原市
(1口)
谷岡 一也 江戸川区
上 高子 世田谷区
脇 英親 文京区
土屋 元子 千葉市
川崎 依邦 大阪市
宅間 董 川崎市
清水 泰代 高崎市
広江 重徳 浅口郡
田中 武雄／多美子 水戸市
林 登居／ヒサ子 八千代市
長嶺 まさ 茅ヶ崎市

ご寄附

高木 桂子 墨田区
外山 経子 八王子市

池野 朋彦／晶子 横浜市
山口 憲明 日野市
小宮 信介 三田市
武田 英敬 三鷹市

2024年2月

正会員

(1口)
田井 良知 吉川市
堀 香奈美 横浜市
山田 裕子 三鷹市
中原 和夫 那覇市
北 マツ 印旛郡
近藤 玲子 秩父市
アジア・コミュニティ・センター21 文京区

ご寄附

酒井 杏郎 渋谷区
中原 和夫 那覇市
松崎 松平 世田谷区
栗原 静子 気仙沼市
近藤 玲子 秩父市
岡崎 尚弘 新座市

2024年3月

正会員

(1口)
駒場 一成 大田区
久保 哲也 北区
金野 隆光 柏市
石川 清子 渋谷区
白井 久美 文京区
石渡 真紀 帯広市
大野 大平 北本市
榊 正義／正子 相模原市
野口 明美 三鷹市
泉 憲子 日野市
真弓 忠 渋谷区
赤星 裕 船橋市
坂詰 貴司 船橋市
村山 秀男 八王子市
馬杉 栄一 札幌市

ご寄附

萩野 さき子 富里市
河合 秀高 横浜市
榊 正義／正子 相模原市
綿貫 勤 秋田市

皆様の温かいご支援に
感謝申し上げます

ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人ですので、財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

協会のあらまし

名称：公益財団法人 アジア学生文化協会

ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION (ASCA)

所在地：東京都文京区本駒込 2 丁目 12 番地 13 号

代表者：理事長 白石勝己

設立：1957 年（昭和 32 年）9 月 18 日

故穂積五一氏創設

目的：日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済の交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

◇ 主な事業 ◇

- (1) 留学生宿舎の運営
- (2) 留学生日本語コースの運営（進学希望者向けの日本語を中心とする教育）
- (3) 留学生に対する情報提供支援
- (4) アジア語学セミナー
- (5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、(一社)日・タイ経済協力協会、ABK 留学生友の会との連携・協力

◇ 会費（年額） ◇

正会員 1 口 1 万円

賛助会員 1 口 5 万円

特別会員 1 口 10 万円

会員には広報誌「アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間 2 千円（＋税）でお送りいたします。

当財団に対する寄附金は、所得税、一部自治体の個人住民税、相続税、及び法人税の税制上の優遇措置があります。

巻末言

■ブラウン氏とは、私が 1980 年にタイバンコクに赴任する直前、期待とともに不安が高まっていた時、アジア文化会館でお会いし泰日経済技術振興協会（TPA）で一緒に頑張ろう、と励まされたことを思い出す。それから、40 年以上仕事での先輩というより、兄のように慕い尊敬もしてきた。彼はタイの計量計測、度量衡事業の第一人者として活躍された。

■私は 1984 年末まで、TPA で事務局アドバイザーとして働かせてもらった。ブラウン氏の講演録で語られている通り、日本側は事業に口を出さないとと言う約束で、現地タイ側で事業計画が策定された。日本留学や研修を終え帰国したメンバーが理事や委員となり、タイの発展のためには何が必要か、毎月開かれる理事会や委員会であらゆる議論が交わされていた。

■TPA の委員は、昼間は会社や政府のトップ、中堅として、あるいは大学教員などの仕事に就いている方々で、TPA での会議は夕刻から始まり夜半まで行われた。彼らには交通費ほどの謝金のみで、実質手弁当でのボランティアだった。タイの産業の明日を担うという熱意が、彼らを突き動かす原動力になっていたのだと思う。

■工業計測委員会からカリブレーションセンターの計画が出されたとき、財務も見ていた私は購入する計器類の値段に驚いた。工場などの計器の正確さを校正、証明する計器なので、当然ながら精密機器で高価であるのは当然なことだ。私は「これは政府のやるべき仕事で、民間の仕事ではない。」と意見を言った。

■委員会メンバーからは「計器の正確さはすべての品質の基本。迅速なサービスは民間の役割。これが日本で学んだ我々のミッション。」と叱咤された。現在の TPA の工業計測センターが、タイの産業、工業を支えるその重要な役割を見るとき、彼らの先見性は見事に証明されているのだと思う。

■さて、今の日本を振り返ると、ジャパンプランドと称えられた基準の正確さや品質の公正さを揺るがすようなニュースに暇がない。今の留学生にも「これが日本で学んだミッション」と胸をはって言うてもらえるのだろうか。 (白)

アジアの友 2024 年 4 月号

2024 年 6 月 20 日発行（通刊第 558 号）

年間購読（送料共）2,000 円＋税 1 部 500 円＋税

発行人 白石勝己

編集 アジアの友編集部

発行所 公益財団法人 アジア学生文化協会

東京都文京区本駒込 2—12—13（113-8642）

電話番号：03-3946-4121 ファクシミリ：03-3946-7599

振替口座：00150-0-56754 E-mail：tomo@abk.or.jp

ホームページ：(http://www.abk.or.jp/)

published by THE ASIANSTUDENTS CULTURAL ASSOCIATION

(ASIA BUNKA KAIKAN)

2-12-13, Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN

☎ +81-3-3946-4121 FAX +81-3-3946-7599

Email：tomo@abk.or.jp Home Page：http://www.abk.or.jp/

会員並びにご購読のお申込みはメール・電話にてお願いいたします。



学校法人 ABK 学館

ABK学館日本語学校

所在地 〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-12-12

電話番号 +81-3-6912-0756

FAX +81-3-6912-0757

URL <http://abk.ac.jp>

E-mail info@abk.ac.jp



ABK
COLLEGE

3階建て校舎。
最新の耐震設計です。

- 留学生の絆が作る日本語学校 -

ABK学館日本語学校（英語名称：ABK COLLEGE）は1957年に設立された公益財団法人アジア学生文化協会が寮生活や日本語を学習した留学生、そして多くの関係者のご寄付と献身的な協力により、学校法人による日本語学校として2014年4月に開校しました。2023年には開校10周年を迎え、アジア各国の留学生を中心とした様々な国の方が在籍しています。



授業風景イメージ



寮の一例



アジア学生文化協会

ABK COLLEGE

| 一般課程 (進学・就職・生活・資格取得 等) | | | |
|----------------------------|----------------------------|-----------------------------|---------------|
| | 4月入学 1年コース | 10月入学 1年半コース | 4月入学 2年コース |
| 授業時間 | 860時間 | 1,290時間 | 1,720時間 |
| 入学検定料 | 20,000円 | | |
| 入学金 | 100,000円 | | |
| 授業料 (施設・教材費含む) | 640,000円 | 960,000円 | 1,280,000円 |
| 学歴補完課程 (文部科学省認定 準備教育課程) | | | |
| | 4月入学 1年コース | 10月入学 1年半コース | |
| 授業時間 | 860時間(日本語) +120時間(基礎科目) | 1290時間(日本語) +120時間(基礎科目) | |
| 入学検定料 | 20,000円 | | |
| 入学金 | 100,000円 | | |
| 授業料 (施設・教材費含む) | 720,000円 | 1,080,000円 | |

